

専門誌『TATTOO TRIBAL』（富士美出版）のショップ欄を見ると、北海道から沖縄まで全国300を超える店が並ぶ。各地で開催された「タトゥーイベント」の様子も満載だ。松山、出雲、福山、八日市……決して大都会だけの話ではない。

若い女の子むけの専門誌『TATTOO girls』（双葉社）のグラビアでは、女の子が胸のタトゥーを誇らしげに見せる。「彫り物」ではなく、ライトなファッション」として紹介され、「ストリート系のおしゃれを指す女の子にとっては、もはやピアスの次は『タトゥー』を！という自然さなのです」とコピーは語りかける。

19歳の時に蝶のタトゥーを肩に入れたアイコ（25）は、「小さいころから外人さんが入れているのを見て、格好いいな、と思って憧れていたんです」と言う。



ミュキの左腕に刻まれたバラのタトゥー

「入れた後、親は驚いていたけれど、もうしょうがないとあきらめたみたい。100%反対されるとわかっていながら、黙って入れたんです」

もし友達に、「私もタトゥーを入れたい」と相談されたら？

「数年前までは、『やめた方がいい』って答えてました。親に『泣かれた』とか『それだけはやめると言われた』って子が多かったから。理解する人ばかりじゃない。でも最近は、感覚がすごく変化してきたと思う。アムロやチャラなんかのタレントが入れて、いかついイメージが消えたでしょ。おしゃれなアイテムになってきた感じかな」

3か月ほど前、肩の後ろに桜のタトゥーを入れたさやか（22）は、「見た目がきれいかどうかのポイント。女の子だからグロテスクな柄はいや。桜を入れたのは、はかなくてきれいで、前から好きな花だったから」と言う。

彫ろうと思ったきっかけは？

「友達が入れているのを見て。服ではなかなか違いが出せないけど、ボディピアスやタトゥーは、『一線を越えた』という満足感があるしワクワクする。このタトゥーに慣れてきたら、また別のを入れたくなるかも。私、飽きっぽい性格な



あやの背中を「マシン」の尖った先端が細かく削っていく

んや」って。別れ話まで出たけど、私は別れたくない。タバコやめるから、タトゥーの方はがまんしてよって、なんとか話しかけてる」

姉妹の母は40代半ば。

号をふられるのではなく、自分は「特別な存在」でいたいんです。タトゥーが入っているから偉いってわけではないだけだ」

19歳と21歳の姉妹に会った。妹は背中に大きなトライバルの図柄を、姉は左肩に小さな黒いほかしの蓮の花を彫っていた。

姉はタトゥーを入れたことで彼氏と大ゲンカした、と明かしてくれた。

「カレシの家では、体に傷をつけることはぜったいにダメ。『お前と結婚して子どもができて、もし子どもが入りたいって言ったらオレは絶対反対。でも、お母さんは入れているのにおかし」と言われたら、どうやって反論する

んです」と屈託なく笑う。

1960年代のジャニス・ジョップリン、70〜80年代のパンク、ヘビメタバンドのミュージシャンらが次々に披露し、若者たちのカルチャーとして浸透していったタトゥー。最近ではベトナムの首に刻まれた大きなタトゥーも、ファッション化に拍車をかけたようだ。

消えない色を肌にし、独特な図柄を彫りつける文化。世界各地の部族・民族の中で、身体装飾の一つとして伝えられてきた行為。日本では、「刺青」として広く知られている。龍や般若など伝統的な意匠を、「和彫り」と呼ぶ。それに対して、西洋風の小さな蝶や花などを入れる「ワンポイント」、細かい線やほかしで絵画的に表現をする「フラインライン」、肌を黒く塗りつぶし図柄を描く「トライバル」など、東西の入れ墨を含めた総称として、「タトゥー」という言葉が使われている。

スタジオ「Al-Haut」では、客が花を入れたと言ったら、一からオリジナルのデザインをおこす。「フラインライン」という絵画的な図柄が中心だ。棕妃が本格的に彫り師としてスタートしたのは、7年ほど前のこと。

「大学4年生で、就職するか音楽活動を続けるかで悩んでいた時、腕に花のタトゥーを彫りました。それがきっかけで、この世界へ。彫り師として最も

緊張する点は、どんな小さいタトゥーにも、大きな責任が伴うことです。一生消えないからこそ、絶対にいい仕事をせなあかん、そう念じて続けてきました」

大学の史学科ではインド・中近東の歴史に興味を持ち、ゾロアスター教について研究した。その経歴を今、タトゥーのデザインにも生かしているという。

他人と自分との違いを識別する「お守り」

「痛みがすごくて、途中でホンマ、やめてくれて感じてましたね」と、27歳のミュキ。左腕には10センチ以上ありそうな、ポリウム感のある真っ赤なバラの花。

「皮膚の下に骨がある場所は、特に痛い。鋭い痛みです、ガリガリ削りますから。2時間超えたらがまんも限界に近づいて、やめてって感じになって、全身に力が入って。体力と気力の限界かな、と。やっと彫り終わったけど、大きい傷なのでひきつって熱を持ってました。落ち着くまでは1週間くらいかかったかな。とてもファッショントという軽い感覚ではないですね。重たいといえば、たしかに重たい」

色と形がとてもしっかりしていて、人目をひくデザインですね。

んだんです。心の切り替えを求めているのかもしれないね。タトゥーは時間がたつと少しずつ色が変わっていく。一緒に生きているようで、育てていく感じがして、うれしかった」

タトゥーについて、娘さんたちとはどんな会話を？

「社会的にはまだ拒絶感を持つ人の方が多いでしょ。当然だと思います。親の気持ちとしては、これ以上彫るのは結婚してからにしてや、男つかまえてからにして。相手の親や親戚が拒絶することもあるし、姑に拒絶されたら嫁としてはつらいと思うから」

深い記憶を「ピン止め」する装置

ファッションとして、ライトな感覚でタトゥーを楽しむ人たちがいる。

その一方で、装飾的な意味合いを超えて、タトゥーへとたどり着いた人たちがある。深い個人の「想い」が、皮膚に文様を刻む行為と、ワンセットになる。そんな、「ファッション」とは色合いの違うタトゥーが、現代社会の水面上で増殖していることを、私は初めて知った。

「お兄ちゃんの名前をデザイン化して、左肩に彫ってもらいました。3年前、突然、海の事故で死んだんです」と、27歳の女性は黒い文様について

身体を「切り刻む」女たち

「実は、わざと大きくて派手なバラを入れたんです。このタトゥーに負けないように生きたい、と思って。大切な人との別れがきっかけで、入れることに踏み切りました」

彼女は、しっかりとした口調で、この話を続けた。

「自分の気持ちが弱ってへなへなの時なんか、腕のバラの迫力に負けてしまう。これを見ると、がんばらなくちゃと思える。カッコつけて言えば、人生のライバルだし、お守り。私には母親しかいないので、母が死んだら天涯孤独。モノだったら壊したり無くしたりしてしまふけど、タトゥーだけは一生、私から離れないんです」

タトゥーを彫った前後では、どんな変化がある？

「やっと『番号札』から抜け出た、という感じですね。他の人と自分との違いを、ちゃんと識別できるようになって、うれしい。集団の中の一人に分類され



身体を「切り刻む」女たち

話し始めた。

「特に仲の良い兄妹ではなかった。喧嘩もしたし、忙しくて会話もろくにできなかったし。ごく普通の兄妹……その兄が突然、いなくなっただけです。もうこの世にいないんだ、ということを受け止めなければならなかった。亡くなってしまったって、お兄ちゃんには私にとって、一生変わらない存在。だから、兄の名を肌にも刻もう、と思いました」
彼女はそうした理由を、いちいち他人に説明しない。時々、彼女のタトゥーを見て、忠告する人もいるという。「体を大事にしないとね」と。

「でも私は、『大事にしているからこそ、タトゥーを入れたの』って、心の中で答えているんです」
冒頭でベッドに横たわり、背中大きなタトゥーを入れていたあやもまた、深い「想い」を込めていた。

て、中絶しなければならなかったんです。「産まない」と決めた時、鳥のタトゥーをカラダに刻むことにしました。ええ、子どものかわりに。これから一生、私と一緒に暮らしていくんです」
心底嬉しそうに語り、微笑んだ。その切ない願いのような心情に、私は鳥肌がたった。

「消えない、という意味で『一生』の決断をできた。こんな大きなタトゥーを入れる痛みにも耐えられたんだと思うと、前より積極的になったし意志が強くなった」と彼女は言った。
「ここからやりなおそう」、「がんばって再出発しよう」。カラダに刻む文様が、人生を切り替えるためのジャンプ台になった、そんな人にも出会った。
「身体に残るから、記憶が風化しない。あのシビアな過去を乗り越えてきたんだ、と、あとで笑って言えるようになってほしいな」(ミユキ)
嫁からこんな話も聞いた。
「自傷が止められないという人が、何とか切る癖を止めたいからタトゥーを彫りたい、と。腕のリストカットがだんだん移動していく。でも、タトゥーの絵があれば、そこで切ることを止められるから、と。その人のために、と願いながら彫りました」
人生への深い思いを「ピン止め」するために、あるいは生き方を大きく転換させるバネとして、カラダに文様を



一つ一つのタトゥーに「想い」が刻み込まれている (写真は嫁妃の作品)

刻む。痛みを伴う「一生消えない」一回性の経験だからこそ、カラダが記憶装置になる。
最近まで、多くの人々は変わることのない人生の指針を、思想や宗教に求めてきた。読書や思索を重ね、自分の「精神」にそれぞれの哲学を刻み込んできた。あるいは、愛する人との忘れられない大切な思い出を、「心の奥にしまいこんできたはずだ」
だが今、そうした形の無い「一生」ものに取って代わって、「カラダ」に生涯変わらぬ刻印を彫り込む、普通の

女たちが出現している。
あなたはどうかだろう？
胸に手をあてて、かつてあなたが愛した人のこと、初恋の相手について思い出してほしい。もし、別れた恋人が、その思い出を身体に刻み、墓場まで持っていく人生を歩んでいるとしたら？

彼女たちが選んだ道は、過去を「はかない思い出」として持ち続けることではなかった。ともすれば忘れてしまいうるようになる苦い経験、片時も忘却することのないよう、身体にはっきりと刻み込むことだった。
「ある人にとってタトゥーは、想い出や強い決意とタトゥーの図柄とをセットにして、自分定着させる、そのための手段なのだと感じます」(嫁妃)
服も靴もカバンも、すべてお金で手に入り、自由に切り替えのきく、現代生活。だからこそ、「一回きり」「私だけ」「もとへ戻らない」タトゥーを、カラダというキャンバスに、「一生もの」として刻み込む。
そうした切実さを求めている人たちが、漂流するカラダが、あなたの隣にもたしかに存在する。

△文中敬称略／以下次号▽